

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科セミナー
シリーズ「グローバル・ジャスティス」第43回
報告者：矢野久美子(フェリス女学院大学教授)
「今なぜ、ハンナ・アーレントを読むのか」

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第43回目は、「今なぜ、ハンナ・アーレントを読むのか」と題されたご講演を矢野久美子氏から賜った。

ハンナ・アーレントに関する映画が公開され、日本においても、学界のみならず、世間においても、大学生や市民など、彼女の著作の新たな読者が登場する機運が近時高まっているといえる。

そのような潮流において、改めて、アーレントの専門家の目から、彼女の作品を読む意味を現今のコンテキストに引き付けて、語っていただいた。

まず、講演の冒頭で、矢野氏は、マルガレーテ・フォン・トロッタによるその映画『ハンナ・アーレント』のメッセージとして、「思考することの大切さ」と「それを成し遂げることの過酷さ」、この二点を強調された。アーレントはアイヒマン裁判を傍聴した経験から次のような考えに思い至った。それは、彼の蛮行を人類史上未曾有の「根源悪」というよりは「凡庸な悪」の所産だと解すべきである、というものであり、その逆説的な恐ろしさを著作『イェルサレムのアイヒマン』で力説した。しかし、その著作をめぐって、アーレントは身の危険を感じるほどの非難の嵐に見舞われたわけだが、われわれは、そのときに彼女が示した姿勢、すなわち「思考」を貫徹する姿勢にこそ、その「思考することの大切さ」と「それを成し遂げる過酷さ」が見て取れるのである。

この「思考」することがアーレントを理解するうえでの(更にはまさに今アーレントを読むうえで見逃しえない)ライトモチーフとなる。アーレントにとって、厳密にはそこには現代が「過去」から偉大なる伝統の光によって照らされることがなくなっているという、縮めて言えば「過去」との断絶としての「現代」という思想史上の診断が下敷きとなっているが、「思考」することは、人間の他の「精神」の働きにおいては見出せない「立ち止まる」という、それ自体、時間の流れへの根源的抗いを為すことを一つの特徴とするものである。この「思考」することが本性的に「立ち止まる」ことを能くするものである以上、その思考の産物である著作もまた、通常理解を拒むものであることは言うまでも無い。事実、彼女の『全体主義の起原』においては、ナチ・ドイツを、ヒトラーを頂点に戴く単なる独裁体制とは看做さず、むしろその権力構造に着目すれば、中心の曖昧模糊とした玉葱構造であることを指摘し、また、『人間の条件』においては、現代文明の特徴を資本主義下における労働中心社会の登場による人間の「世界疎外」、それに加え、地球の「自然な」富の産出を遥かに凌駕する「人工的な」富の産出過程に突入しており、その象徴的な出来事として、大国が挙って宇宙へパイロットを送りだしていることを取り上げ、その様を「地球疎外」と喝破する。

いずれにせよ、アーレントの著作に通底するものは、一度立ち止まって考えて見れば、全く世界が異なって見えてくるということ、そして更にはその世界のあれやこれやの出来事に対して、われわれは全く無縁ではなく、むしろ、その状況へのコミットを必要不可欠なものとして捉えざるを得ない、という謂わば「実践」の哲学であろう。しかし、それは大それた大義名分に依拠した「実践」ではなく、身近の人びとの関係性、その共通世界への「愛」

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科セミナー
シリーズ「グローバル・ジャスティス」第43回
報告者：矢野久美子(フェリス女学院大学教授)
「今なぜ、ハンナ・アーレントを読むのか」

によって為されるべきものであることは強調しておかねばならない。

以上は、講演のごく一部の報告に留まるものである。実際には、アーレントに馴染みのない聴講者も想定され、ギュンター・ガウスによる有名なインタビュー動画の紹介を始め、彼女の主要著作の論点と簡単な伝記的事実を併せた幅広い内容を持つ講演であった。その詳細は矢野氏の近著『ハンナ・アーレント』(中央公論新社、2014年)に求められたい。アーレントを理解するうえで必要なエッセンスが興味深い伝記の記述と関連付けられ、立体的な把握を読者に可能とする好著である。

(文責：和田昌也)